自伝抄　第3回

「捨て犬か雑草のように」

芹沢光治良

父のせいで狭い肩身

坊ちゃんもがまんするんですよ。引っ越しできてよかったから…と言った。

その小父さんの言葉の意味はわからなかったが、今もはっきり覚えている。幼児だからとてあなどるものではない。

たしかに正月前で、西風が強かった。小さな家で祖父母と娘ざかりの二人の叔母と五人、ランプの灯の下でいろりをかこみ、西風の音に耳をやったその夜は、何年来初めて家族水入らずに迎えた家庭のだんらんであっただろうが、下の叔母がふと愚痴を言った。

「こんなに落ちぶれたのは、上の兄さんのせいだわね。財産を神さんにあげる前に、なぜみんなに相談しなかったかしらー」祖父は煙管でいろりの端を叩きながら、彼奴は親にも相談しなかった、とポツンと言った。彼奴も上の兄さんも父のことだと解ったが、おちぶれたとは、どういうことかわからなかった。

おちぶれたということがわかったのは、五歳すぎてからではなかろうか。わが家の東側の土地が売れて、そのためにわが家のシンボルのように遠くから見えた二抱えもある榎を二本切り倒したが、榎の小さい褐色の実があたり一面にばらばらと降った。

その実は、数粒口に頬張ると甘味が口中にひろがって、めったに菓子など買えない、児童には天授の菓子だったから、近所の子供が一心に拾った。

私は仲間に入りたさに、無数に褐色の粒のついた小枝を持って、子供などに近づいてーボクやるよ、と差し出した。

子供たちはたがいに顔を見合わせるなりーおちぶれたくせに、ぼくなんておかしいやとか、おちぶれた坊ちゃんなんて、遊んでやるもんかとか、叫んで散ってしまった。

その時隣の清ちゃんが現れてーおい、行くよと叫んだから、後をおうようにして寺子屋へついて行ったから、五歳すぎていた。

誰も遊んでくれないので、前に客部屋の兄さんと親しかった隣家の若者にまとわりついて、叔母から、清ちゃんの腰巾着とからかわれたが、清ちゃんは高等小学校を出ると、お寺の本堂で、元の沼津兵学校の先生の指導で、数人の仲間と勉強をしていたが、私はいつもついて行って、その背後にちょこんと座ったものだ。

漢字とルビだと先生は笑って傍聴を許してくれた。

論語の素読など聞いていてすぐ暗唱できたが、面倒な習字などのときには先生は奥さんのいる庫裏へ連れて行って、お嬢さんと遊ばせてくれて、奥さんからお嬢さんと一緒に読み書き、算術の手ほどきを受けた…。

その頃のことがらは何事も全て記憶しているが、それを書くのがこの文章の目的ではない。

ただ、その頃すでに祖父は気難しい顔をして無口になって、叱る時以外に口をきかなかった。それもーもう網元ではないぞ、舟子に落ちたんだぞとか、おちぶれても、心はまつすぐにしろ、その言葉はなんだ、行儀が悪いぞ、とか、わがままは許さんぞとか、文句はきまっていた。子供心に、家にいづらくて私はお寺へついて行ったのだった。

つづく